# 粟野北遺跡発掘調査報告

2022 (令和4) 年2月

三重県埋蔵文化財センター

### 例 言

- 1 本書は、令和2年度に実施した農業用施設アスベスト対策事業城田・下外城田地区に伴う粟野北遺跡の 工事立会による埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 工事立会調査地は、三重県伊勢市上地町に所在する。
- 3 工事立会調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産部から依頼を受けて実施した。現地調査から報告 書作成に至る経費は、三重県教育委員会が文化庁からの国庫補助金を得て一部を負担し、その他を三重県 農林水産部から執行委任を受けて実施した。
- 4 工事立会調査の体制は次のとおりである。
  - 工事立会調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課 課長 穂積裕昌 主任 元座範子
  - 工事立会調査期間 令和2年10月1日~10月6日
  - 工事立会調査面積 60 m²
- 5 現地での図面作成及び写真撮影は工事立会調査担当者により、遺物写真撮影は当センター 主査 森川常厚による。
- 6 本書の執筆は元座及び森川が行い、編集は森川が行った。
- 7 本書の遺跡地形図で使用した図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得た三重県共有デジタル図 を用いている(令和3年4月5日三総合地第1号)。調査区位置図に使用した事業計画図は三重県農林水産 部の提供による。
- 8 本書で用いた座標は世界測地系で、方位は第VI座標系による座標北である。標高は、東京湾平均海水面を基準とした。
- 9 土層及び土器の色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社、2005年版) に拠った。
- 10 調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

# 目 次

Ι.	前言		(元座	範子)	)	1
	1.	調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・				1
	2.	調査の経過				1
	3.	調査の概要			••••	1
	4.	文化財保護法に関する諸手続き	•••••		••••	1
ΙΙ.	位置と	環境	(森川	常厚)	)	2
Ⅲ.	遺構		( )	' )	)	6
	1.	層序			••••	6
	2.	遺構	•••••		••••	6
IV.	遺物		( )	' )	)	8
	1.	出土遺物				8
	2.	参考遺物				9
V.	結語		( E	ı )	)	1 0

### 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	3	第5図	調査区土層断面図	7
第2図	遺跡地形図	4	第6図	遺物実測図	8
第3図	調査区位置図	5	第7図	参考遺物実測図 10	0
第4図	調査区平面図	6			

### 写 真 図 版

写真図版 1	調査前風景	写真図版 4	S Z 7 · S D 8
	調査前風景		····· P 1 等検出状況
写真図版 2	調査区西部全景	写真図版 5	層序
	調査区中央部全景		粟野北遺跡出土遺物
	調査区東部全景	写真図版 6	
写真図版3	S E 4		
	S D 1		

# 表 目 次

### I. 前 言

#### 1. 調査に至る経緯

本書で報告する調査は、農業用施設アスベスト対 策事業城田・下外城田地区に伴って実施した、埋蔵 文化財の記録保存にかかるものである。当事業の主 体は三重県農林水産部、実施機関は伊勢農林水産事 務所農村基盤室である。

当該事業地には栗野北遺跡や奥の浦遺跡等の埋蔵 文化財包蔵地が周知されているため、事業の実施に 先立ち確認調査を行った。その結果、事業地のうち 栗野北遺跡で60㎡について、遺構・遺物が良好に包 蔵されていることが判明した。この取り扱いについ て伊勢農林水産事務所と協議を行った結果、アスベ スト用水管の更新時に工事立会調査による記録保存 を行うことになった。

#### 2. 調査の経過

調査は、令和2年10月1日から10月6日の期間中 3日間実施した。以下、その経過を調査日誌から抄 録する。

#### 【調査日誌(抄)】

[令和2 (2020) 年]

10月 1日 調査開始。表土掘削。 遺構掘削。写真撮影。 遺構実測図作成。

- 2日 表土掘削。遺構掘削。写真撮影。 遺構実測図作成。
- 6日 表土掘削。SD1掘削。写真撮影。 遺構実測図作成。調査終了。

#### 3. 調査の概要

調査は、工事立会として実施し、調査区西側から 開始した。

表土及び包含層は重機を用いて掘削を行い、遺構 検出・遺構掘削は人力で行った。

遺構実測図は、全体平面図及び土層図を1/20で当 センター職員による手測りで作成した。

写真の撮影には、一眼レフデジタルカメラを用いた。遺構写真は、ニコンD3300で撮影し、補助的に

コンパクトデジタルカメラを用いた。遺物写真は、 ニコンD800Eを用いた。

なお、夜間の交通安全を確保するため、1日毎に 埋戻しを行う必要があった。そのため、全長40mの 調査区を3分割し、1分割毎に即日調査を完了する ことを繰り返す調査手法を採用した。このため、調 査区全体を通した写真撮影は実施できなかった。

#### 4. 文化財保護法に関する諸手続き

今回の調査にかかる埋蔵文化財の文化財保護法等 にかかる法的措置は、以下のとおりである。

#### (1) 県文化財保護条例第48条第1項

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等 の発掘通知書」

三重県教育委員会教育長あて三重県知事通知令和2年7月8日付け、勢農第3193号

#### (2) 県文化財保護法条例第48条第2項

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事に ついて」

県知事あて県教育委員会教育長通知 令和2年7月8日付 教委第12-4066号

#### (3) 文化財保護法第100条第2項

「埋蔵文化財の発見・認定通知」 (伊勢警察署長あて三重県教育委員会教育長通 知)

令和2年11月2日付 教委第12-4413号 (元座)

### Ⅱ. 位置と環境

栗野北遺跡(1)は伊勢市上地町から栗野町に広がる埋蔵文化財包蔵地である。当地は、伊勢平野最大の河川である宮川の下流にちかい中流左岸に相当する。紀伊山地の高峰、大台ヶ原を源に山間部を中央構造線に沿って東へ流れるが、当地付近で行く手を丘陵に遮られ、向きを北方に変え、伊勢平野に流れ出る。この宮川の屈曲部は南東側が丘陵、北西側には沖積平野という対照的な地形を呈している。栗野北遺跡は、その沖積平野の自然堤防上に位置し、標高は7m前後である。東方を流れる宮川までは1km、西方200mには小河川の汁谷川が流れ、それを境に約10mの段差をもって河岸段丘となる。

伊勢市史によれば、中心的な時代としては弥生時代中期と平安・鎌倉時代とし、鉄滓の出土より野鍛冶が行われていたことを想定している。また、集落にちかい西側では弥生時代の遺物が集中するとしている。約300m西側には、県内で著名な弥生時代の遺跡である中楽山遺跡(2)があり、弥生時代後期の竪穴住居や方形周溝墓が検出されている。また、北方1kmに所在する野垣外遺跡(3)でも同様な時期の遺構・遺物が検出され、近隣の奥の浦遺跡(4)、マコモ遺跡(5)でも弥生土器が採集される等、当地域には弥生時代の大集落が、中期から後期、さらに終末期にかけて続いていたことが想定される。

既述した段丘上のマコモ遺跡内には8基の古墳で 構成するマコモ古墳群(6)があり、明治42年に開 墾された1号墳の出土遺物によれば後期から終末期 の古墳のようである。栗野北遺跡の所在する段丘下 においてもお頭塚古墳(7)、小野古墳(8)が伝 えられるが、開発行為により消滅し、古墳かどうか を含め詳細は不明である。律令期に入っても、既述 した野垣外遺跡で掘立柱建物等が検出されており、 弥生時代以降、人々の活動は続いていたようである。

遺跡に南接する栗野集落が基幹と思われる旧栗野村は、光明寺古文書によると11世紀後半から13世紀後半の売券に記載がみえる。このことから、中世前半にも一定の人口を有していたことが推測される。調査例では、前述した野垣外遺跡の発掘調査で鎌倉

時代まで下る竪穴住居や溝が検出されていることに加え、近隣の各遺跡から中世の遺物が採集されている。南西2.5kmの岩出遺跡群跡(9)では12世紀中葉から14世紀前葉にかけての大集落の一端が検出されており、当地に所在したと伝える神宮祭主の館と関連付けている。その館の場所が岩出城(10)とされ、神宮祭主大中臣氏の居館とされる。戦国時代には土塁や堀を巡らした城となったが、1600年には廃城となったようである。また当地は、神宮の神官とする荒木田氏や度会氏の勢力下にあり、当遺跡西方の田丸や内城田が荒木田氏の本拠とする説もある。

中世後期にはいると、北畠氏による当地への圧力が高まる。『氏経神事記』には1450年に北畠氏が当地を焼き払った記載があり、1486年には、宇治と山田の対立に北畠氏が関与した山田合戦が勃発する等、不安定な世相となるようである。栗野北遺跡西方の段丘縁には寺山城跡(11)が所在する。段丘縁を除く3方に土塁と堀を巡らし、一辺60mの単郭方形の城館を呈する。北側には旧熊野街道(12)があり、街道守備を担う城館と推測されている。さらに北西の外城田川右岸の段丘上には、中久保屋敷跡(13)と伝承される城館がある。一辺60mの方形を呈する様な土塁があるとされるが、詳細は不明である。ただし、中世城館に関しては、その分布密度は比較的薄い地域といえる。

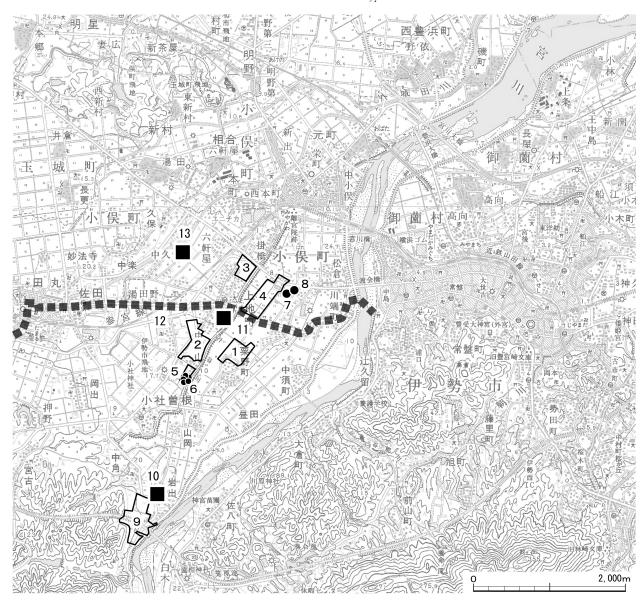
なお、既述した熊野街道であるが、平安時代後期の熊野信仰の高まりにより神宮参拝後に熊野へ向かう街道となった。熊野信仰が衰えた後は、西国巡礼がこれに代わり、近世まで多くの道者が通行したようである。信仰の道となる以前から生活の道であった可能性は高く<sup>®</sup>、栗野北遺跡周辺はこうした交通の要衝にあたるため、弥生時代から中世に至るまで連綿と遺跡が連なる状態を呈するものと思われる。

(森川)

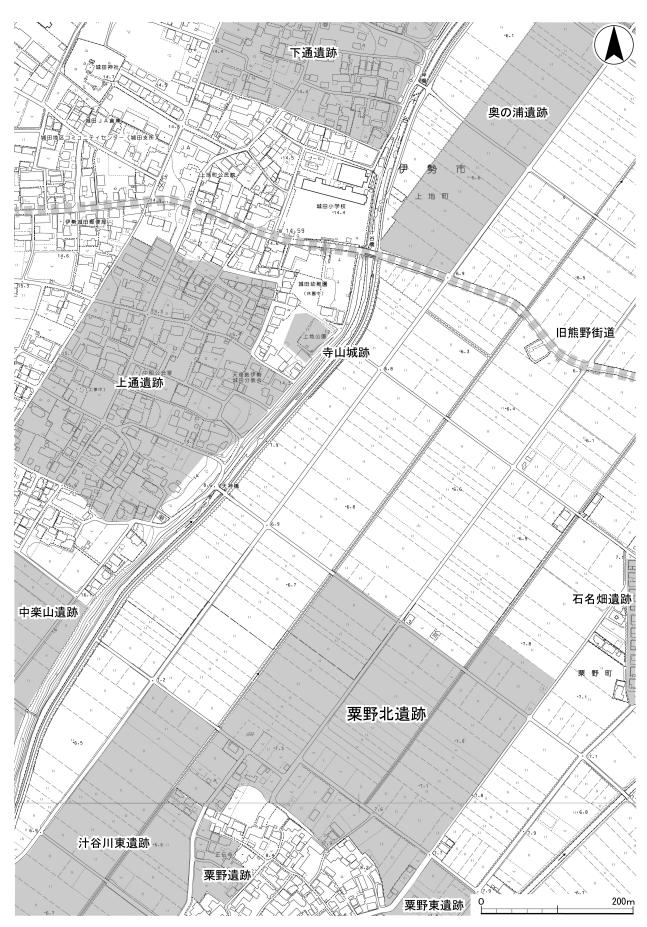
#### (註)

- ① 岡田 登「第三章 遺跡概観」『伊勢市史 第六巻 考 古編』伊勢市 平成二十三年三月三十一日
- ② 下村登良男「伊勢市上地町・中楽山遺跡」『昭和47年 度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県 教育委員会 1973.3
- ③ 下村登良男「伊勢市上地町野垣外遺跡」『昭和48年度 県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教 育委員会 三重県文化財連盟 1979.12
- ④ 前掲①に同じ
- ⑤ 前掲①に同じ
- ⑥ 下中邦彦編集『三重県の地名』株式会社平凡社 一九八三年五月二○日

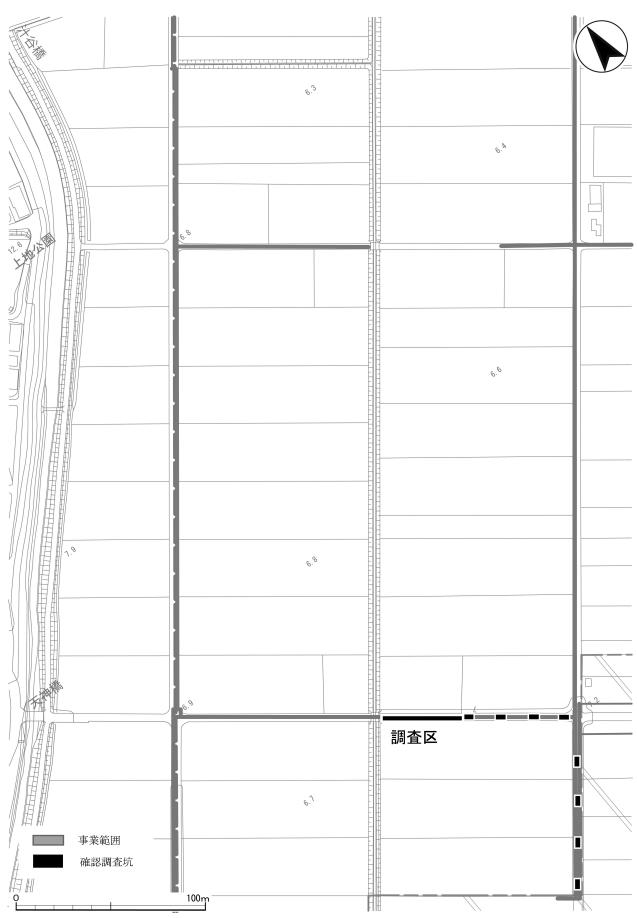
- ⑦ 前川嘉宏『近畿自動車道(勢和~伊勢)埋蔵文化財 発掘調査報告-第6分冊-蚊山遺跡左郡地区』三重県教 育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1993.3
- ⑧ 上村芳夫「岩出城」『三重の中世城館』三重県教育委員会 1976
- ⑨ 「角川日本地名大辞典」編纂委員会『角川日本地名 大辞典 24 三重県』株式会社角川書店 昭和58年6月8
- ⑩ 前掲①に同じ
- ⑪ 前掲9に同じ
- ⑫ 前掲①に同じ
- ① 樋田清砂「熊野街道の歴史的特性」『歴史の道調査報告書 I (熊野街道)』三重県教育委員会 昭和五六年三月



第1図 遺跡位置図(1:50,000) [国土地理院「松阪」「伊勢」1:50,000より]



第2図 遺跡地形図 (1:5,000)



第3図 調査区位置図 (1:2,000)

### Ⅲ. 遺 構

溝・土坑等を検出しているが、調査区が狭小なため、その性格を明らかにできたものは少ない。時期は、一部に古代の遺物を含むが混入の可能性が高く、鎌倉時代のものが大半と考えられる。

#### 1. 層序

現況は圃場整備が施工された農道で、舗装がされている。したがって、自然の微地形は把握しがたい状況である。表面はアスファルトで、その下60cmまでは、圃場整備の際に造成された客土である。その下に暗褐色の極細粒砂が20~30cmの厚さで残存し、これが包含層と考えらえる。アスファルト下約1mで黄褐色の極細砂があり、これが検出面である。この層をアスファルト下1.4mまで確認したが、変化はなく、厚さ50cm以上の堆積を呈するしっかりした層である。ただし、包含層を含めて砂質が強く、粘性が弱い。

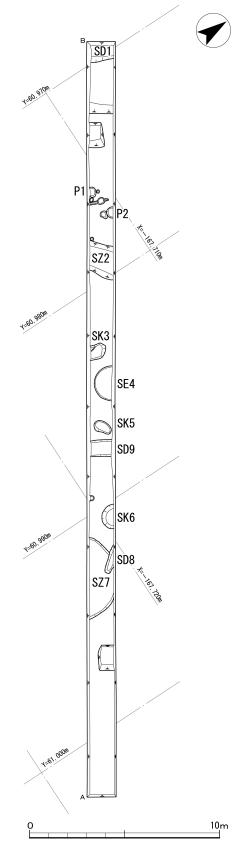
#### 2. 遺構

**SD1** 調査区北西端で検出した。対岸は調査区外のため確認できないが、現況から農業用排水路により消滅している可能性が高い。幅1m以上、検出面からの深さ30cmをはかるしっかりしたもので、埋土は暗褐色の細粒砂である。土師器の皿や鍋、山茶椀や青磁椀の多様な遺物が出土しているものの、いずれも小片である。

**SZ2** 念のために掘削したが、風倒木痕であることを確認する結果となった。

SK3 調査区端での検出のため全体の形状は不明であるが、短辺60cm、長辺80cm以上の長円形を呈するものと推測される。埋土はSD1と同様であるが出土遺物は無く、直接的な時期決定根拠がない。

SE4 調査区端での検出であるが、直径1.8m の円形を呈するものと考えられる。埋土は前述したものとは異なり、にぶい黄褐色の細流砂である。深さ50cmまで確認したが、既述したように砂質の土壌のため崩落の危険が高く、調査区も狭小なため掘削を断念した。しかし、その形状から井戸であるもの



第4図 調査区平面図 (1:200)

と推測している。掘削を途中で断念したこともあり、 山茶椀や陶器の小片が出土するに止まった。

SK5 調査区中央部で検出した長辺1m、短辺60cmの不整長円形を呈する小型の土坑である。深さも検出面から20cm未満の浅いものである。古代の土師器甕の小片が出土しているが、他に中世以降と思われる薄い土師器の小片が複数あり、この甕は混入と考えた。

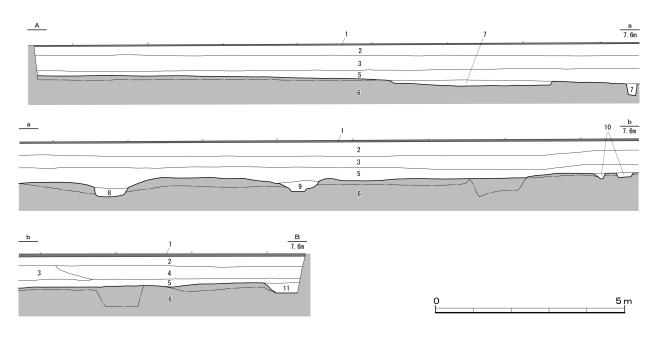
SK6 調査区端での検出であるが、直径1.3m の円形を呈するものと考えられる。深さは検出面から15cm程度の浅いもので、埋土は暗褐色と褐色の細流砂が混じった状態で、一様でない。山茶椀や土師器の小片が出土したのみである。

SΖ7 調査区中央部に浅く広がる粘質土である。

粘質土は褐色を呈し、調査区外へ広がるため不明確な部分も多いが、直径4mの円形の範囲に広がるものと考えられる。厚さは20cmに及ばない薄いものであるが、均一な厚さを保っている。土師器皿や陶器の小片が出土している。

SD8 調査区中央部で検出した幅50cm、検出面からの深さ30cmの幅に比べ深いしっかりした溝である。北東側は調査区外へ続き、南東側は調査区内で途切れている。埋土はにぶい黄褐色の極細粒砂で、須恵器や山茶椀が出土している。

SD9 調査区中央部で検出した幅90cmの溝である。深さは検出面から10cm程度で、幅に比べ浅いものである。このためか出土遺物は無く、時期決定の直接的な根拠はない。 (森川)



- 1 アスファルト
- 2 砕石
- 3 白色粗砂〈客土〉
- 4 褐色粗砂〈客十〉
- 5 10YR3/4暗褐色極細砂<包含層>
- 6 10YR5/6黄褐色細粒砂<検出面>
- 第5図 調査区土層断面図(1:100)
- 7 10YR4/4褐色粘土質シルト<SZ7埋土等>
- 8 10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト<SD9埋土>
- 9 10YR3/3暗褐色細粒砂<SK3埋土>
- 10 暗褐色土
- 11 10YR3/3暗褐色極細粒砂<SD1埋土>

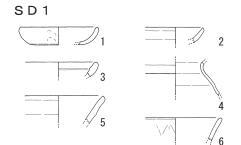
### Ⅳ. 遺 物

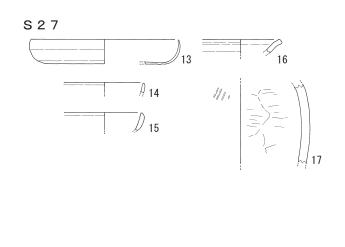
#### 1. 出土遺物

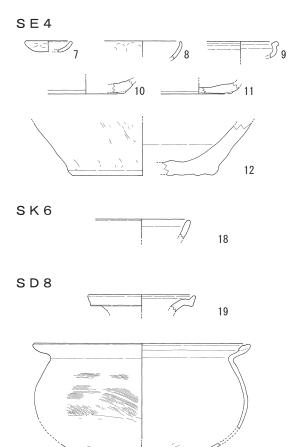
遺物は少量が出土したに過ぎない。しかも大半が 小片で、全体の形状が明確なものは無い。

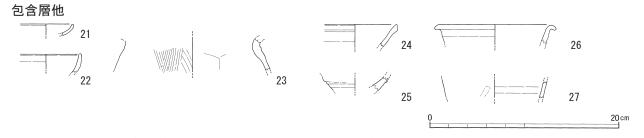
こうした中で最も残存が良好なものが、SD8出土の土師器鍋(20)である。口縁部形態は2段階c型式に分類され、体部には細かいハケメ調整、器壁は薄くなるものの極限までの薄さはない。14世紀初頭の鎌倉時代末期の年代が与えられる。中世の土師

器皿は器形の歪みが大きいものが多く、小片での判断は困難であるが、 $SD101 \cdot 2$ 、SE408、 $SZ7014 \cdot 15$ は器壁に厚さを残しており、口縁部の内弯状態から $A_3 \sim A_4$ に分類され、13世期後半の時期が与えられる。山茶椀では、 $SE4010 \cdot 11$ は高台が形骸化したもので、SD105やSK6018は口縁部が直線的である。これらは<math>III段階7型式以降で13世紀中頃を遡らないものとなる。この様に出土遺物の中心は、13世紀後半から14世紀初頭の鎌倉









第6図 遺物実測図(1:4)

時代後半のものである。

一方、SD1の土師器鍋4やSZ7の土師器皿13 は器壁が薄く、時期が下る様相を呈する。13の口径は15.7cmを測る。器形の特徴と比べれば、口径が過大なものとなるが、前述した器形の歪みのために最大径を表示した可能性がある。形式的にはA5に分類され14世紀後半の室町時代に下るものと考えられる。また、SD1の土師器鍋3やSZ7の山皿16は時期が遡る形状を呈する。土師器鍋は1段階、山皿はⅡ段階に分類され、12世紀前半から中頃となり平安時代末期に遡る。この様に、少数ながらも平安時代末期や室町時代のものもあり、鎌倉時代後半から末期を中心に概ね中世全般に及ぶ遺物が出土している。

なお、若干ではあるが、飛鳥奈良時代の土師器甕 23や須恵器壺19のように時期が大きく離れるものも 出土している。

#### 2. 参考遺物

第7図に示したものは、地元から寄贈された遺物 である。今回の調査の前年に当該地周辺で行った確 認調査の際に、地元居住者の家に保管されていたものを寄贈いただいたものである。

1は須恵器の長頸壺である。頸部以上を欠損しているが、体部は完存する。ただし、高台は後世に削り取られたような痕跡を残し、その大半を消失している。比較的肩の張った体部形態を呈し、Ⅲ型式3段階あたりの7世紀後半のものと考えられる。体部には「昭和四十年秋 上地町字奥野浦 一,二○五番地 ヨリ発掘ス 野口彦一 六十二才」と墨書されており、栗野北遺跡の北方に所在する奥の浦遺跡の埋蔵物であったものであろう。

(森川)

番号	実測	遺構	器 種 器 形	法			調整技法の特徴	色 調	胎士	残存度	備考
HF /7	番号	旭竹	器 形 土師器	口径	器高	その他		_ "			- m
1	2-6	SD1	.III.	8. 2	1.8	_	外面未調整	浅黄橙10YR8/3	微砂粒含	口縁部1/12以下	
2	2-5	SD1	土師器皿	_	_	_	_	灰白2.5Y8/2	1.2mmの砂粒含	小片	
3	2-8	SD1	土師器 鍋	_	_	_	_	浅黄橙10YR8/4	2mm以下の砂粒含	小片	
4	1-7	SD1	土師器 鍋	_	_	_	ナデ	浅黄橙10YR8/4	1.8㎜以下の砂粒含	小片	
5	2-2	SD1	山茶椀	_	-	_	ロクロナデ	灰黄2.5Y7/2	9mm以下の砂粒含	小片	
6	1-10	SD1	青磁 椀	_	_	_	_	灰白10YR8/1	精良	小片	龍泉窯。
7	2-4	SE4	土師器皿	4.8	1. 1	_	外面未調整	にぶい橙7.5YR7/4	1.5mmの砂粒含	口縁部3/12	
8	2-7	SE4	土師器皿	_	_	_	_	にぶい橙5YR7/4	1.7㎜の砂粒含	小片	
9	1-8	SE4	土師器 鍋	_	_	_	_	浅黄橙10YR8/4	微砂粒含	小片	外面に炭化物付着。
10	1-6	SE4	山茶椀	_	_	_	ロクロナデ	にぶい黄橙10YR7/2	精良	小片	
11	1-3	SE4	山茶椀	_	_	_	ロクロナデ	灰白5Y7/1	1.8mm以下の砂粒含	小片	
12	1-5	SE4	陶器	_	_	底径 14.8	外面弱いヘラケズリ	青灰5PB5/1	2mmの砂粒含	底部1/12	
13	1-1	SZ7	土師器皿	15. 7	2.6	_	底部外面ナデ	灰白2.5Y8/2	微砂粒含	1/12	
14	1-9	SZ7	土師器皿	_	_	_	_	にぶい橙7.5YR7/4	微砂粒含	小片	
15	2-3	SZ7	土師器皿	_	_	_	_	浅黄橙7.5YR8/3	微砂粒含	小片	
16	1-4	SZ7	山茶椀	_	_	_	ロクロナデ	にぶい黄橙10YR7/2	精良	小片	
17	2-1	SZ7	陶器	_	_	_	外面一部タタキ、内面工具ナデ	褐灰10YR6/1	微砂粒含	小片	外面に自然釉。
18	2-9	SK6	山茶椀	_	_	_	ロクロナデ	黄灰2.5Y6/1	微砂粒含	小片	
19	3-2	SD8	須恵器 壺	11. 2	_	_	ロクロナデ	褐灰10YR4/1	3mm以下の砂粒含	口縁部1/12	
20	4-1	SD8	土師器 鍋	22. 8	13. 0	_	体部下半内外へラケズリ、外面上半ハケ メ	にぶい黄橙10YR7/3	1.5mmの砂粒含	口縁部4/12	
21	3-7	Р3	土師器皿	_	_	_	外面未調整	にぶい橙7.5YR7/4	微砂粒含	小片	
22	3-4	包含層	土師器 皿	_	_	_	_	橙7.5YR7/6	微砂粒含	小片	
23	1-2	SK5	土師器 甕	_	_	_	外面ハケメ、内面強い工具ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	2.5mmの砂粒含	小片	
24	3-1	包含層	山茶椀	_	_	_	ロクロナデ	灰白2.5Y7/1	1mmの砂粒含	小片	内面に自然釉。
25	3-6	P1	施釉陶器 天目茶椀	_	_	_	体部外面下半ロクロケズリ	黄灰2.5Y7/2	1㎜以下の砂粒含	小片	鉄釉。
26	3-5	包含層	陶器	12.0	_	_	ロクロナデ	灰N6/1	精良	口縁部1/12	
27	3-3	P2	施釉陶器 壺	_	_	_	ロクロナデ	灰黄2.5Y7/2	精良	小片	鉄釉。

第1表 遺物観察表

#### (註)

- ① 伊藤裕偉「中世南伊勢系土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会 1990
- ② 新田洋「三重県における古代末~中世にかけての土 器様相」『マージナルNo.9』愛知考古学談話会1988.10
- ③ 藤澤良祐「瀬戸古窯址群 I」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要 I 』瀬戸市民俗資料館 1982
- ④ 前掲②に同じ
- ⑤ 前掲①に同じ
- ⑥ 前掲③に同じ
- ⑦ 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981年11月25日
- ⑧ 前掲③に同じ

### V. 結 語

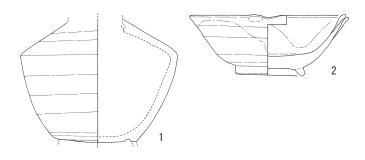
今回の調査面積は狭小な60㎡で、加えて栗野北遺 跡の北西隅にあたるため、遺跡の状況を明確にする には遠く及ばないものであった。井戸や溝等を検出 しているが、既述したようにまとまった遺物の出土 がなく、時期決定の根拠に乏しい。そのなかで、S E4・SK6・SD8は鎌倉時代後半から末期とし て良いものと思われる。SD1には室町時代に下る 土師器鍋が混入するが、最終埋没が室町時代に下る ものと考え、全て同様な時期の鎌倉時代後半から末 期のものとしておきたい。SZ7については、遺物 に時期幅があり、包含層的なものと考えておく。栗 野北遺跡に隣接して汁谷川東遺跡、粟野遺跡、粟野 南遺跡、粟野東遺跡と中世の遺物が散布する遺跡が 現在の粟野集落を取り囲むように広がっている。お そらく、居住位置を微妙に変えながら中世全般にわ たって集落が継続し、現在の粟野集落に繋がるもの

と推測される。今回の調査は、その一時期の一端を 垣間見たものと思われるのである。

なお、寄贈された奥の浦遺跡の遺物であるが、山 茶椀は完形で、中世墓への埋納遺物の可能性がある。 須恵器長頸壺は既述したように高台を削り取られて おり、頸部もその際の欠損とすれば、何かに転用さ れたものかも知れず、本来は完形で埋蔵されていた 可能性も生じる。墓壙への埋納品と想定すれば、奥 の浦遺跡の近辺には小野古墳やお頭塚古墳が知られ ており、埋没した終末期古墳群が広がることを彷彿 させるような興味深い一品である。 (森川)

#### 「註〕

① 岡田 登「第三章 遺跡概観」『伊勢市史 第六巻 考 古編』伊勢市 平成二十三年三月三十一日



第7図 参考遺物実測図(1:4)

番号	実測	遺構	器種	法		-	調整技法の特徴	色 調	胎士	残存度	備考
HH 13	番号	AES ITT	器形	口径	器高	その他	M TE 1X 12 0 7 10 150		//H	7.4117.00	VIII5
1	1-2	_	須恵器 壺	_	_	底部 7.6	ロクロナデ	灰白5Y7/1	3㎜以下の小石含	体部完存	
2	1-1	_	山茶椀	16. 4	6. 4	高台径 6.6	ロクロナデ	灰白2.5Y7/1	精良		四方に輸花。口縁部に灰釉。

第2表 参考遺物観察表



調査前風景 (北西から)



調査前風景(南東から)



調査区西部全景 (北西から)



調査区東部全景(北西から)



調査区中央部全景 (北西から)



SE4検出状況 (北から)



SE4 (南から)



SD1 (北から)



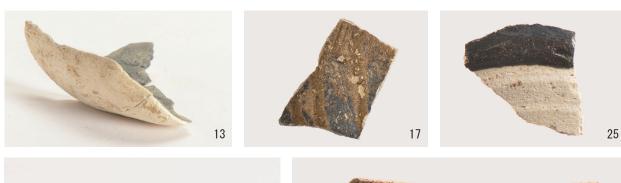
**SZ7・SD8** (南から)



P 1 等検出状況 (北から)



層序(北から)







粟野北遺跡出土遺物





奥の浦遺跡出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	あわのきた	いせきはっく	つちょうさほ	うこく						
書 名	栗野北遺	跡発掘調	查報告							
副 書 名										
巻 次										
シリーズ名	三重県埋	蔵文化財	調査報告							
シリーズ番号	406									
編著者名	元座範子	· 森川常	<b></b>							
編集機関	三重県埋	!蔵文化財	センター							
所 在 地	₹515-03	325 三重	県多気郡明	月和町竹川5	503 TEL	0596 (52)	1732			
発行年月日	2022(令和	和4)年2	月							
ふりがな	ふりがな		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所 在	E 地	市町村	遺跡番号	イレが年	<b></b>	神宜規則	神宜田惧	<b>神色</b> 原色	
あわ の きた い せき	いせ、しあわのちょう 伊勢市栗野町 っえじちょう 〜上地町		24203	a 375	34度	136度	20201001		農業用施設ア	
栗野北遺跡					29分	32分	$\sim$	60 m²	スベスト対策 事業城田・下	
	$\sim$ $\rfloor$	上地町			12秒	50秒	20201006		外城田地区	
おく うらいせき		うえじちょう			34度	136度				
奥の浦遺跡	伊勢市	上地町	24203	a 96	29分	40分	_	_		
					36秒	36秒				
所収遺跡名	種別	主な	時代	主な	遺構	主な	遺物	特	記事項	
and man II and male						十師器	• 須恵器			
栗野北遺跡	散布地	鎌倉	·時代	井戸・清	す・土坑		山茶椀			
奥の浦遺跡 散布地 飛鳥奈良 平安末 一 須恵器 山茶椀 寄贈遺物						贈遺物				
		<del>11.</del> 3	人不				<b>汁</b> 1列			
世郎コン申	111-12-111-1	トロンよるまけ	いっ 仏 四 上	7 N+ A 11-	t / L or J# do	112- 14-	= 3- 10-11-11-11	د ۱۱۱ <del>- اسا ا</del>	711XF 1 2 2 11	

栗野北遺跡は宮川左岸沖積地に位置する。鎌倉時代の溝や土坑・井戸を検出したが、調査区が狭小のため 詳細は不明。なお、地元から近隣の奥の浦遺跡で出土したと伝わる須恵器と山茶椀の寄贈を受けた。

要

約

三重県埋蔵文化財調査報告406

### 粟野北遺跡発掘調査報告

2022(令和4)年2月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 共立印刷株式会社